其角句解

全

利5
1983

1983

吾茅園おきふ雪子句よ
信屈ヲ菊嶽ヲ名ら元ものの
ものくよりかいはまを元ものの二巻
とるの一秘置ふを東村ものよ
如の天月貝ひくわく字勝ヲ

蓉陳蓉

自ら繰返し我の恢人うn
もらんとせんやうしや
句は桜葉もまさるの人も
道ゆくゆゑ自らゆえあたち
のおもく黄蝶菜英述

晋斉句解叙

晋子の句はいかなるや活潑潑地
なるの興象物に一眼のかぶ
又眼ありて者とゝも彼後の
題の物の意匠経営ゝ活潑
奇絲の華ゝ難しの工きわ

何さまの地よりて妄つまの解をなす
水とは名を地へ真華の頭没交
游子ふ人と深沙山蛇足を深
望の境地を宮ものの殺ものも
事を得さるの蔦のごとし

寛政丙辰皐　莊鄙題

晋子發句概解　共陸拾伍吟

茉臆叟莊丹述
門人
黄蝶堂茉英校

○蓬茉が讃

島とよの絵三ツの書院のかゝりて
高ようくとハ雨氣のあす不ゆて海を近く
迫ゝ見ゆふ三ツの書院ハ蓬

菜方丈蠣洲のこうを形容する也

○加州小松歓喜寺奉納

梅花見那を待く庵子かう

田村の謡曲ハ一人のらうあり有かのお

きなかつらぬいたく我はれぎやうにこ

ゝとゝてふんぢ一人のたんをまち

大かんをたんすをすてひう

ちさしてちやさりぬさわくぎやうにこ

ゝとゝく是をんなさろのれさい

たん又たんかをまてと有しハ是坂の事

たゞ〻梅の姿をつくるかう

破魔ちやゝ当初紀裏四天王

祝商山とかう其ハ紀裏　御免の方

く四人ちとやゝ泰平の四天王ハ

破〻往昔ハ四天王ハ甲冑を着すと

當時ハ討力ハ破魔ちも海の意

○宰府参詣ハ舟中

菜のもとハ小坊主ゝ角かう名

梅ふに亀戸のゝ潭北の集に晉
子うつゝのふる葉の庵茅の戸ふる山路
を人とゝ案し雖と終ハ閑へ也てを
○護國寺のうつ吋馬ゝ乗ゝ
ゝ雲やもとの家ゝ新ハ浜藻
表中郎送李湘洲使浙尺
山東道千艘與萬艫郵樓常下
鶴驛飯一炊菰閉口聽朝事降
心祖佛徒不言知向越面上有

西湖晉子自注に袁中郎面之西
湖とゝ中郎ハ明朝の文人袁中
郎全集二十卷千載集に
さくら花山風ゝかに
ゝ志かのゝ波 左中將良經 新とゝ
物全にむゝ
りゆへ又淳正廿郎仲國のゝ
をのつゝ
○悼後の立志 初言ハ女ゝ

昔の俳諧三井寺義仲春
立志伝二代はくさつるい立志のほ
ゆる遊女ちよと又舞るの風ひをぬ
常ゆるしたる
○大海の意四留　凡六句あり
疑意　蝶の美胡蝶を卯月辰巳助
牡丹蝶下ゆ驕猫又胡蝶の美人世子
道遥遊篇の化水木辰巳助い奇舞
妓役者中て身ゆかりき藝ひとよそ

蝶のかりき
寄竹恋　埋らるものの涙やもとゝ弁
嫦娥皇女英舜崩〜玉ひくかるゝ
涙と弁とをぬふらん紫弁ゆとまるゝの
己ゝ毛色の斑ゆ〜〜紫弁　日斑弁
源弁
動意　ゆるゝ百日ゆまゆゝ別世
猫兒百目ゆるゆゝ乳ばくるゝ〜他ゝ中
新古今戀一ゝのゝゝ姫ゝ中ゆ

さきはてのとしをあてあそぶ者ふ
是則百目ゆるうなきをしらさるを也

寄寺戀　梶木乃柳をそなへあるう猫

源氏幕木ようの基いゆあきのめゆそ玉
いぬくさるふもたれ来まるねし
御息所　愛猫の寺ふるう物の数となる
たるかや

蒸海や塩湯よりするふくさ貝
塩湯い饅頭の家又茶の湯ふ肝砂を販く

名物かるて蒸海い蒸さたのゆうも
花踊ふ梶や歌舞伎の脇踊
ちい程言梅い朝のおうとをる
○市川才牛追善
一子九蔵名ばぎ付ふう
塗新の父いかるる如雄の彩
九彩い故海老彩う動名なう才牛い
故国平郎時門と鈴郎ありよて又い
七とうを法の國ふなる如橋の

柏きに も咲るすいうたなまいりの言
ばいしかけぬふ新い旌子の新乃赤
き紅形容して所事仕の赤く咲り
たるふ言作ふる所

朝星や櫻に寒の色山々

雪子句又宋又云ふ星や櫻宮の色
山々と云し句雪屋寒さの
無感ぎきりし芭蕉翁吉野山な
拾ふる所山中の美景に事ぶさん古

紀行らりの信を感せし序明星の
山々なる殘るけしきは句々
やしく見えるすし文通て
やされるとうよて角う酒狂ゆ心ゆ
隣らもしも句ゆ感て角う流々
醒る期ゆ山句の句い為世清す扨
々ふとて勘氣ゆ聽うとう

○園女う家ゆて
かゝきの神いつまとゆの雛

○是

是子短冊よ事書園女り姿小くと
りの古事記曰雄畧天皇登幸
葛城山之時百官人等悉紹著
紅紐之青摺衣服彼時有其自
所向之山尾登山上人既等天
皇之鹵薄亦其裝束之狀及人
衆相似不傾尒天皇望令問曰
於茲倭國除吾亦無王今誰人
云云故吾爲名告吾者雖惡事而

一言雖善事而一言言離之神
葛城之一言主之大神者也云云
神社啓蒙曰諺曰昔役小角集
衆神於葛城金峯間架石橋其
以不早成而小角怒呪一言主縛
繫之深谷云蓋小角葛城里民
而一言主者天神裔胤也何爲其
然乎いまゝしくおのもきりるもたく
ひとりのうるわしきかつまの

神梅まるか宮寺集子事書
雛のまへ宮殿くらまつ陸くらる
童子文通ひ井は是い大きふ雛ひ
候くちいさく立るくゆりもとめく
ひとりたとひ
山桜猿を放くして猶の事
同じ事書の井は高き梅を称しの
かるゆてしいとひ
雀子はあり陳子の姫子新

自注ひとひひとりくやくしとひ人と
あり井蛙物は為氏はいよくの大公
へゆくしきるゆ子ひとひひとりくく
くしとひてひん源氏を祭ます
ゆの子はいいぬとひふ はふゆ
とひひとりふるひるとはるものをとて
はゆ源氏物語のようゆり陳
子はよゆ入くゆり孟は大公東
門院の上つ童は此ひとく

○鬚水

ちくまの春の水や鮫の髓

筑摩川 信濃風雅集よりちくま川

春の水いすゝふるきてゆくゝるかな

○のゝ宮 順徳院宮のうゑて流る

鮫の骨ふしぬるかな

○長嘯の記よ濃州より歓言を国ゆ

すゝてより佛をたゝ口小ほう

せゝいうるまゝ哀れ

きのふんをむりやたゝのこゝ

其四ほあり

五手ほ馬くりんを毎下ほ茱萸

ちりの一るむゝい日お坊よ偽るゝ

て拾客ほのすると中よるの耳へは

風ゝ中ゝ坂延年ほ俳諧也

延年ハ昌周御連歌師ゝ句も

と予ゝうゝ藤の耳へい水ゝ杜ゝゝ

句ゝ和句ゝ藤耳へゝるの耳よ

風と外興ある

景清の所帯見せもて二ぜ郭

らん紅葉の所帯のうく大文字ひ姫ようも

又文藤坂より通りを二タ所帯との仮

警戒長刀かふかけしう 軍

営のもとふもちすほとをを大長

刀ふとかもとかかもを

有明の面紀をやかりおを

長嘯拳白集逆衣と大和うと

ぬせたの大臣くく月花を面白

こすつき所ふれてとかう

皇人間ゝ四月ふ郭公

白氏文集十六大林寺桃花

人間四月芳菲盡山寺桃花始

盛開長恨春歸無覓處不知轉

入此中来又法女桃花子ゝ人ゝの

四月をとをいくもふとかう

院咸の三味線ちくく 時鳥

阮咸翁の七賢は一人ゝとゝ絃を
阮咸ゝ月琴ゝゝ出ることゝ藝林伐山に
記す訓蒙圖彙に阮ハ阮咸なり月琴
同ゝ四絃十二柱或ハ五絃十三柱又
有月琴圖与阮咸異なり本朝ハ
寛文の頃琉球ゝゝ傳ゝゝゝと
○曲終無人聲
曉ゝ反吐いとゝゝ　鄭　仏
王元美史記叙湘靈鼓瑟於秋

江之上曲終而人不見ゝゝ妓娼
嬢句ゝゝゝゝ八千八聲ゝゝゝ血を吐と
ゝゝ反吐ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
吐と泳すとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
子規一二ゝゝ橋の却ゝゝ
一二ゝ橋江戸ゝゝ一ゝ目二ゝ目の橋
ゝ一ゝゝゝ二の橋ゝゝゝ此句ゝゝ
ゝゝゝゝ景色ゆく短冊ゝの所ゝ

○見

所持の家あること

文七小しゐまる方ニ庭のうとつゝも

牛の子をうつるもるあるのうとつゝ角

なりとそれ身をいたのすゝ　慈鎮

文七え結のゝ花のもの

○丹羽左京守のもの

ゆゝしうなる家勢

黒牡丹　祢ゝ祢ゝ祢ゝもの大なるも

かの墨ゝ萩かゝる男ゝをかゝ祢ゝ

祢ゝさけゝもゝ祢ゝ

木ゝ祢ゝて物をゆゝ祢ゝ

ゝ鎗をゝゝうゝ祢ゝ

ゝゝゝゝとゝ牡丹の

解る通して見る

懸立ゝ長者ゝ美如黒牡丹

唐劉訓京師富人梁氏開國嘗

假貸以給軍京師春遊以牡丹

為勝賞訓邀客賞花乃繫水牛

○跋

數百前指日此列氏黒牡丹也
とさしれた家にたつる懸の數作り
毛の〳〵毛論ゟ數百の中とそう樓の
如〳〵長者の看を求すと數花ゟ
氣象不調百子ゟ三作ゟ換るに
支考十論為弁拙ゟ十二拙や移動
肉の句二作拙句三作の誤り

○一晶の家坊ゟ
日蓮よ求す情よ蟬の鳴かい

日蓮法華書の中身延山法華拙ゟ梅ゟ
一乗の菓ゟ結い下枝ゟ鳴蟬ゟ
滋〳〵故よ淳淵境の文句ゟ梅
塚の鳴所いとあり日蓮山入の庭ゟ
百子ハ此詞ゟよるなん

○望相ゟ

雲見ゟ鎌倉君ゟ日ゟ照ゟ
鎌倉ゟ菓の叫の唄とゟや坊さんよ
御ふさんよ鎌倉五山ゟ四ゟくすゟ

あは海人せ藻食ゆる日ゝ思ふ雲見
叶ハ樗ゆゑ

○翁ゆゑ文ゝ都のそゝみ色ゝ文ともち
風ふるゝ雨もまさてるゝ関ゆるを
ゝゝめて

丈山の海ゝ思ひあと沼 海ゝ年
石川嘉右衛門 叡山の樹一葉も村雨
過ゝてゝわゝゝゝかせゝ小川の清
見ハ光の沼ゝ新ゝ耶ゝと詠ゝ

ゝゝゝ沼ゝ往ゝ記ゝ

○五月十日雷雨永代島の
第宿小屋ゝゝゝゝ
明ゝゝ神 明ゝ晴ゝ鄭の蓋
源氏ゝゝの巻ゝゝ記雨風い
ゝゝゝ博物志ゝ雷の明ゝ記晴ゝ記雨
ゝゝハ腹の疾ゝゝゝとゝて蓋

蓑のとよ叶ふ紅く月の色
矢根の歌舞妓の浄瑠璃よ
叶ふ田ぶ見むつくと紅ありもの
活作ありう
蘆もあ寺ぶ鼓かううて
難波の謡曲よ波ぞそうりさん
きう花ぞうの曲いかりうは入白と
はひき如すあ山ぶ大鼓
波ふいようてうもかうくい打

出ふ野ふ仏ふる寺ぶ無ぶ木ぶ
御堂の叶ふ鼓をいふ
業研ぶ彩炊あうすう冷の月
梅花心易ふ冬ぶ間の対部康節一
子と猫と擁て坐ふよ茶茶
りふ来ふ猫と茶とう考文
子の心易ふう月知ふ足研をかうよ
来ふいこが用ふうのと推せる
冷の月ふ閑舞ふと或俳子の考

理當然也

○宗因先月をうしなひ句はとうとく
芋ゝ〳〵元僧都の二百貫
法也〳〵仲一六十脚ゝ真乗院て
筆紙僧都とそやんとそやつきこ智者
なるまゝいとらといつもたれ
らのそてあるくらひくく法我の
意ゆそあるきゆきるる法ようりたち
くりて元きわとたをきはくら

一なりゝ文をもよみなるこゝ坊を百貫ゝ
費てかゝるまゝ三百疋をいもかゝるの
なりとさためて京なる人さかの川事
をきて十年ほどうりまて芋から
はしりかゝすめゝるかとて
又ゝ用ふりちゆふとくくして
其ゝしみふ其ゝ二百ゆの
物をまゝ身ふはらけかく
まゝひるまふ有ゆき道仏

○[illegible]

者ありとて人中なる　芋川

先月江戸に雪小　宗国

○寺

[illegible]月ぶぐう僧い[illegible]ふり[illegible]

菊葉生三[illegible]ふかくけふもふる波を

[illegible]まつ読み[illegible]あれい雁の[illegible]

[illegible]

名月や[illegible]江[illegible]ふ[illegible]雁

[illegible]句と一[illegible]

一句[illegible]子の定不定の句と子

江戸堀江町星野柱馬甘窓の

家小二句の[illegible]甘窓[illegible]

子の門人[illegible]

○中の帰[illegible]

幸清の雪[illegible]昔松

[illegible]清[illegible]

離い敷の[illegible]敷の家なり[illegible]

○七夕[illegible]懐旧の句と同

○兄

行水の数くもしらぬ七夕哥はたてまつる小傘
子供の手すさびに紙張りたる傘をかくして舞不仕画く
伊勢物語の中に水の数くもしらぬ人をたのみてくる
秋のくれ初文の中に蟋蟀の鳴る而則蠕蝒
襍文の中に蟋蟀の鳴る而則蠕蝒
○本集の詞書暑之其中に村雨仕

私語の耳にそこのる
白樂天長恨歌曰小絃
切切私語如
○毎風情の人一藝のもとに
十五にして酒をのみ琴をもてあそぶ
白樂天琵琶行十三學得琵琶成
名屬教坊第一部云云又東方朔
十五學擊劍十六學詩書又南
史鮑照嘗賦擬古詩云十五諷

詩書篇翰藻不通

○吉野山のことせしらこそとはれぬ
ゆくへとよまれし世ゆゑに篠ふて
新政の月見ゆ九月盡
新古今こよひたをすふく風よ身を
しらぬそらにたけの月をこん

頼政

ゆふこん

ト石ゆきにに思ふく辻相撲
仰せよ撲取のまいりを三石と

いつと時こしと達人と愚按ふ
こゝろのひの取をとゝいふ
よもぎ又こゝゆひとのむへきう

月はさそふ詩の舟う山帝う川武う
山帝川武屋形船の名あり著聞集
白河院西川行幸ゆ対詩歌管絃
の船をうへ人数のせふ大納言経
信ゆの船かくも書ら作をいとり
光波三の船ゆ云円融院の御

時大納言公任卿此ものの甚角
田舎句合歌十四左右 月のさそふ詩の
ゆゑ○山高帝の川武の行幸まれ農夫右さ
はたゝ栗の戸泥坊よりかいゝ
月 かきいの呼人芭蕉判 嵐雪序句合
延宝の作ゆゑ
○格枝亭桂ゝ
乾や兌坎震離ス艮坤巽
ゑや秋ふゆりたゝす山ゆゑ

はよみ出ん下の字見ぬよ法いくゆゑて
法三ゑ帝ゆゑ山ゆゑ法三ゑ帝碁碁
人形をつくりふまつまの人形ゆゑ祖
叡慮ゑ備ふ弾の縁と受ける
ゆゑも立ゑ弾る人形のゆゑゆゑて
まゆる如くゑ又ふまゆゑくゆの字よゆ
人とのゑ言ゆるゑ——又ものゆる弱
合ゑ碁ゆ盤ゆてゆき画合ゑ法三ゑ
ゆゑもゆゑ

山城の国たき川の形や鉛西瓜

釜師三孫兵衛今如二月玉箒柯

魯切鉛鑄釜

いさよひや龍眼肉のかゝ皮

龍眼肉ハ殼をゆ〳〵寳を

らる形の既望のくゝめるふ

ゆゝかゝ衣ハ殼ゆゝ比喻ゝ

ゝ也二作

○浪ゆゝく

ゝ寒ハ何とあるゝ寒の中

蝦蟇の狂言ハ毎の中ハ何とあるゝ

苦ゆゝきゝ森の揮まゝたゝ見

ゝゝ毎のせゝつゝ立あゝく

はゝ戸や鎖ゝゝゝゝ冬乃月

平家物語五月見ゝ惣門ハ巻ゝの

さゝ也ゝ作ゝ東の小門ゝゝ入せた女

ゝゝゝゝゝゝと又百義ゝ道灌山ゝく

はゝ道や濁ゝゝゝく貴ゝゝ晉

子を擬し来る

伊勢島を似せぬてまつと神松

伊勢島の高い嶋のように神松、空也

の束帯空也は作り文句は唱

いせ物語のこと歌を引あつて殊勝

なるもの作言五文集捨遺伊勢物語を

着ぬうまことの神松となりいう

○菊花は吳宝什物さて〳〵多〳〵

中ゝも小松とのの法然上人まつせ

松陰の硯

和漢三才圖會平相國清盛齎

黄金若干斤於趙宋天子所求

得者見盛衰記京百万遍什物

松陰硯紫硯石後重衡讓得之

乃最後遺之源空空又賜源智

以本平家親族也

ふたつ

箱〳〵松の硯の箱のよう馬蹄

とかまきの硯のうみの形宮とす

松陰の硯の息ちをもつれうか

神の作なり

帝隅弱法師我門ゆるせ餅の札

弱法師いもものもとひかり師光門く

小餅を貰ふの札をもらふ帝隅の

隅當作寓子

明るふ春のわれらふ嫁ら君

嫁ら君ハ除夜ハ人家ハ柱ハ餅をかく

高くよりもすくをもくいつと去来

湖東問答ハ説ふ按るかゑ集拾

遺妻ハ部ニ入是ハすかもの了

うはぶ

晋子十及圖句解

茉園叟莊丹譲書
門人
黄蝶堂茉英校

雜之部 画ハ畧之ものと圖ハ畧之ものとなり

往昔異邦の佛鑑禪師十牛を圖して人間迷悟の間を示さんとて其書狂言ふうにとりて

○弟

牛ハ声音妓有り又及ともて
ものつくるハ桃のれたり愛小十
及の圖を画讃して笑ひ百世
弱あるものなり　晋其角

○尋牛ノ

やうのあいしゝ計月あれ
雪子ら狂作ふ花街の事ものと
いとも為ふ尋牛として
閑のあいれ原計り月夜北の句ふう

悟道明閑のうち歩句の杖
原ハ木蔭しなりたく其外ハ明る
ものより句ハ吉原ハ郷の多くのるる
外ハ多ものとも言ふ

○呼牛

ふこるものもの歩てもきの句ル
客の呼よ笑ぬ句ものもきなり

○隠牛

夏の夜ハ福四ル仙氣の起ふう

○隠居

隠居隠居ろうろうと玄光の多病を
うれひの藤ぶくぬさ戸

○貧牛

仁朱判やうろうろうかう年男
其世のさまろうろういとうとぜ聚の
塚語貧ふ玄

○廻牛

小便も筧ながらは六月の郵
娼家の二階の小水い軒ろをはしら

○番牛

ほとゝぎすの曉傘をかいせるも
曉傘い蒼子類柑子文集かも文
ひとゝ雨のひとゝさい客小出便りせ

○無牛

きりゝす枕も床も叶屐ぬ
うい茅屋苔はれ藤藉たるさもなき紀
紅園の形容ろ人詩七月篇十

○夢

月蟋蟀入レ我牀下ニ

○半牛

何とやらく冬の夜こゑをかしこ

門たたくの声かまびすしきかな

○送牛

さゑよりの千手陀羅尼や雷の声

浅草寺の晨鐘客夢覚

○老牛

ふるもまさらぬ人のふる時雨哉

裏老冬日の中ふし熟食もち

十及圖句解第巻畢

附錄

莊郎評語晋齋十二句

○曲終無人聲
曉月反吐八隣うかとうきぬ
語逸意凄
[illegible]
餘奇能麗
○[illegible]
明星やゆうきとめぬ山かな

蕉翁嘗遊于芳野山時曉天
偶望雲間櫻花焉忽髣髴
於此章之景情也於是乎慨
然歎角之才秀也既而其言
曰角也性溺于酒雖然如其
醒應有解之日如此章芳芳
延及于萬世遂不可有消之
期者也云是其舊門下所以爲
最第一之者也

京町は貓かよひるる揚屋丁
貓戀之句此後寒寒
無此妙矣
藪入やもとのいあるうるや簑
伶俐之句
海棠のもとのうぶやや朧月
斜抱雲和深見月
朧朧對色隱照陽
是即評

夕立や樂屋をかる傀儡師

俳力抜レ山ヲ

妹ヶ丘ハ嵐の竹ゝ小枝ちる

自寫ニ閑情ヲ来ル誰ヲ復擬ン

名月や名そのよるる松の影

大匠之手

文月や陰ふ感ふ懸の内

情態盡ク于此矣

もゝ衛ゝの赤ハ寒ゝ虎ゝ許

美而畫絕ス

ゝゝゝゝゝ蟬も少雀も濡ゝぼ

吟ゝ哦生ス清風ヲ

共十二章

評語畢

菜根譚五之集の書子が
猶を探ぶ者ならひ
一句くらみ解ける事をは
世道の枝葉初人学問の
人と為す事是閑人たる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

句解跋

晉齋之以不用意爲句也恰如門望芙蓉手碌碌輩安企及焉茱萸優游乎其間國而爲之解隨有益于清談門人英生

書肆

西村源六梓

懷〻來而謂曰欲謀之上
未以同好聞模寫之所也
吾子夫筆爲予善書拳
遂從呼云爾

川對德撰